

市民のつどい2018・ふれ愛講座「金澤翔子さん席上揮毫、金澤泰子さん講演会」(概要)

新宮市では平成30年10月13日、緑丘中学校体育館において「市民のつどい2018・ふれ愛講座」を開催しました。まず、金澤翔子さんの席上揮毫（書の実演）に続き、翔子さんのお母さん金澤泰子さんの「ダウン症の娘（こ）と共に生きて」をテーマに講演。来場された約800人の皆さんは、翔子さんの迫力ある書や泰子さんのお話に感動されていました。

また、アンケートも実施し、約51%の方からご協力をいただきました。その中では、「ありがとうございました。」「元気！」「いただきました。」「感動しました。来て良かった。」「大変良かった。大きな希望をもらいました。」などの感想が寄せられています。詳しくは、一覧表のアンケート欄をクリックしていただくと、アンケート集計結果のPDFファイルがご覧いただけます。



揮毫（書の実演）を行う金澤翔子さん

講演に先立ち、金澤翔子さんが「席上揮毫」（その場で書を実演する）。静寂に包まれる会場で観衆が見守る中、大きな毛筆を持ち、縦1メートル、横3.6メートルの和紙に「共に生きる」という5文字をつづった。最後に落款（らっかん）して完成。翔子さんは「心を込めて書きました」と一言。10分ほどの短い時間だったが、所が掲げられると圧巻のパフォーマンスに会場内から大きな拍手が送られた。翔子さん揮毫の書は、市役所1階ロビーに飾られ、その後市役所3階で展示されています。



会場の皆さんに揮毫した書を披露

続いて、書家・金澤泰子さんが講演し、愛娘・翔子さんとの思い出を紹介した。泰子さんが翔子さんを出産したのは42歳の時。いわゆる高齢出産にあたり、泰子さんはそれが重責と感じていた。さらに、翔子さんがダウン症という病気を持っていたことが分かり、ショックを受けたと回想した。翔子さんが小学校に入学し当時の担任から「翔子さんがいるとみんな穏やかに、優しくなる」と言われ、「翔子もいていいんだと思えた」。小学校4年の時に学校から翔子さんを預かることができないと告げられ、学校をボイコットし、翔子さんに般若心経を書かせた。「なぜできないの、と叱ることもしょっちゅう。涙を流しながら一生懸命打ち込んでいた」。



講演する金澤泰子さん

翔子さんが14歳の時に急死した父親が生前、「翔子が20歳になったら書の個展をしよう」と話していたことを実践した。「一回限りの個展のつもりだったが思いがけずメディアに取り上げられた。書を見てくれる人が涙を流してくれていて驚いた」。泰子さんは、翔子さんの書を観た人が涙を流す理由について「競争心が養われなかったため、人をうらやんだりねたんだりすることも、世俗に対する欲望もない。『みんなに喜んでもらいたい』という思いがあるからでは」と分析した。

最後に、泰子さんは「世界は絶対に“プラス”でできている。生きてさえいれば絶望はない」と締めくくった。